

《解説》

勝田 茂

ヤシャル・ケマル (Yasar Kemal 一九二三-) は、アナトリア中南部の都市アダナの一寒村に生まれた。アダナは地中海から六十キロメートルほど内陸部に位置し、その周辺に広がる広大なチュクロワ平原では、一九世紀中葉から綿花栽培がいち早く行われた。チュクロワ平原は、

また、古来、豊かな牧草を求めて移動する遊牧部族が自主独立の反骨精神を貫いた土地でもあり、彼らの伝統的文化である民間伝承の宝庫でもあった。そのような風土、伝統文化に育まれたケマルにとって、*「チュクロワ」*を語ることは、自らの感性の表象そのものであり、多くの作品での原点となった。

一九五一年、イスタンブルへ移ったケマルは、『共和国』新聞社主に認められ、ルポ作家としてアナトリアから精力的に発信した。やがて同紙に連載した小説『やせたメメッド』(Ince Memed 一九五五年)

において、地主に反旗を翻す若者メメッドの義侠的世界を詩情豊かに描き、トルコを代表する小説家として不動の地位を築いた。オルハン・パムクがノーベル賞を獲得する(二〇〇六年)までは、何度となく同賞の候補としてノミネートされた経緯があり、今日でもその重厚な作風は定評があり、社会派作家として多くの読者に支持されている。

さて、本作品で扱われた「トラクター運転手」(一九五五年)は、第二次世界大戦後の中東で最大のトラクター輸入国となったトルコ共和国においてトラクターがもたらした「負の側面」を描いた作品といえよう。トラクターをテーマにした作品としては、時期的に相前後して、K・ピルバシヤル『ピンク・ワーム』(一九五三年)やT・アパイドゥン『黄色いトラクター』(一九五八年)が発表されている。しかし、前者では余興としてトラクターの力競べが語られ、後者ではトラクター購入をめぐる父子の確執が延々と語られている。いずれの作品も近代化の象徴と

してのトラクターの導入が農村社会へ及ぼした影響には無関心のようなのである。普通、トラクターは一台で十人の小作人を町へ移動させる「永田/中東現代史：一九八頁」といわれているが、まさにその現実が孤独な農民のやるせない心情とともに描かれている。敵視すべきトラクターに対峙して、それを突き放すことも受け入れることも出来ずに悶々とする老いた農民の疎外感が巧みに描かれているといえよう。